

平成 28 年度重点指導事項

日本高等学校野球連盟
審判規則委員会

「礼に始まり礼に終わる」

我が国の学生野球のスタイルになっている、試合の始めと終わりに、両チームがホームベースを挟んでおこなう挨拶「礼」は“礼に始まり礼に終わる”という試合に携わる全ての人に感謝と敬意を払うスポーツマンシップの精神から生まれたものです。

1915年の第一回全国中等学校優勝野球大会において、当時の平岡 副審判長が訓話の中で「徳義を重んじる勇者の試合には、必ず付随すべき礼儀として制定した」と記録に残っています。

ところで昨今、同時に挨拶、同時に礼という礼儀の本質が乱れてきているのではないのでしょうか？

- ・相手チームが頭を下げた後、ワンテンポ遅れて礼をする。
- ・礼の動作と発声のタイミングがバラバラで全員が揃わない。
- また・チーム同士の礼の後、審判委員の方を向いて再度礼をする。
- ・打者がバッターボックスに入る時、投手がボールを受け取る時、伝令が白線を越えるとき等

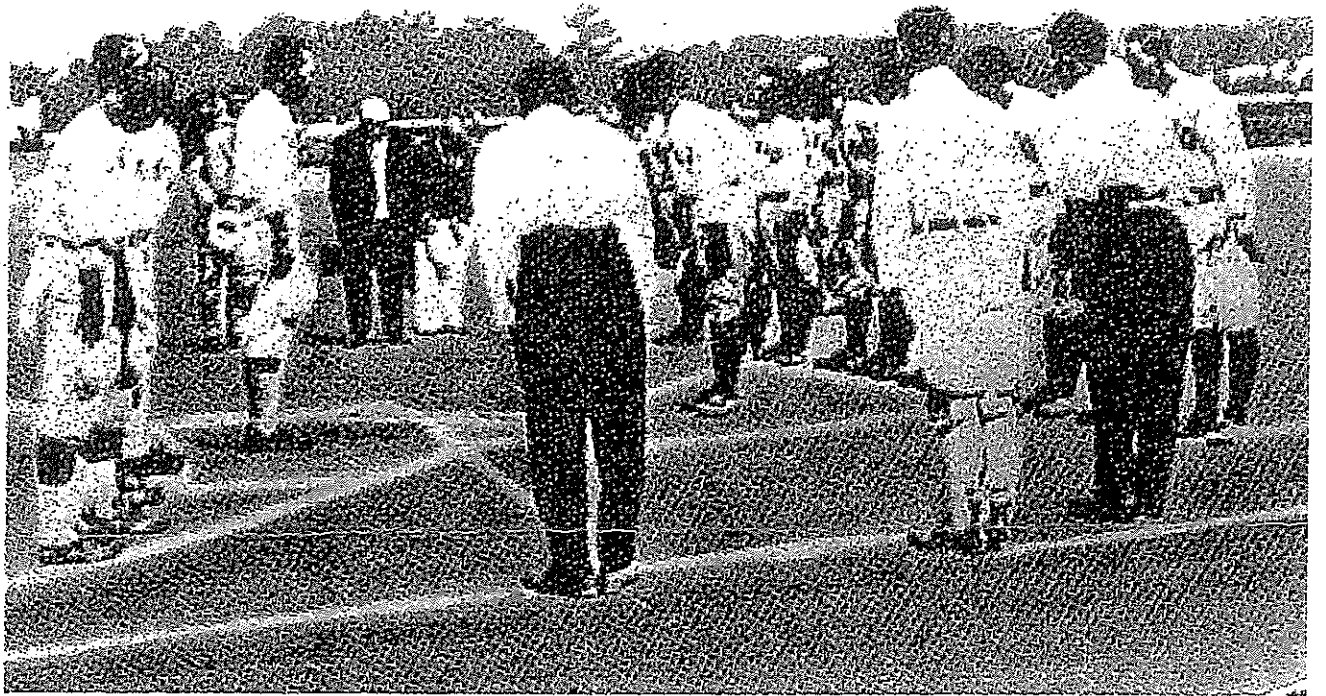
何度も何でも礼をする、必要なことでしょうか？

既に試合開始時に挨拶は済ませています。

甲子園大会では、大会審判委員は試合の始めと終わりには全員立礼しています。また何時の頃からか自然発生的に役員やネット裏におられる各都道府県の野球関係者も、一緒になって立礼されるようになっていきます。

球審は、試合開始時には「始めます、礼」終了時には「終わります、礼」と掛け声をかけています。審判の「礼」の掛け声で「お願いします」「ありがとうございました」と挨拶しますが、この「お願いします」「ありがとうございました」は相手チーム、審判委員だけに言っているのではなく、その試合に関係する全ての人々に敬意と感謝の気持ちを表しているのです。

昨年 100 年を迎えた選手権大会、2018 年には選抜大会は 90 回、選手権大会は 100 回を迎えます。選手・指導者・関係者の皆さん、今一度学生野球の原点のスタイルに立ち戻り、試合の挨拶は始めと終わりの二回で、同時に揃って礼をする「一同、礼」で、100 年前から受け継いだ学生野球精神を維持していきましょう。



第1回大会から始まった敬礼のスタイル

▲審判員心得

一ゲームは左の方式に依りて開始す
先づ兩組選手を本場の左右に相背して整列せしめ雙方キヤプテンのみは更に數歩前に立ちたしめ正副審判長の内一人は本場上に立ち
1 敬礼を行はしめ
2 審判員を兩組に紹介し
3 キーメンの所属及び選手の名を審判員に紹介し
4 審判員をして注意條項を兩組に説明せしめ
5 終つて故障なき時は直に試合を開始し、其の後に於て記録と主審官
朝日新聞社長又は其の代表者に提出す
猶詳細は左の圖の如し

大正四年八月

一、競技終了後の敬礼は開始の時と同様とす
二、試合受賞する場合は審判長及び副審判員同道す
三、審判員の着服は洋服又は制服若しくは主審官に於て特製したる服に
限る

敬礼の仕方を定めた審判員心得

「甲子園」の夢 タンザニアでも

高校野球100年

1915年7月1日。大阪朝日新聞1面で、第1回大会の開催が告知され、高校野球の歩みが始まった。タンザニアで、そして日本で、「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。
(大西史恭)

「オネガイシマース」。本墨付近に並んだ選手が一礼し、野球の紅白戦が始まった。終わると再び集まり、「アリガトウゴザイマシタ」。日本から約1万キロ離れたアフリカ東部タンザニア。現地に住む日本の元高校球児が3年前から野球を教え、昨年2月、初めての「タンザニア甲子園大会」が開かれた。試合は礼に始まり、礼に終わる。実は100年前、第1回全国中等学校優勝野球大会の開催にあたって定められたもの。国際大会にはないその習慣が、タンザニアに根づく。

アザニア・セカンダリースクールのコスマス主将は「規律と尊敬と正義の精神を学んだ。野球と出会って自分が変わった」。今年12月にある第3回に向け、白球を追う。

20面に続く

デジタル版に動画

規律	discipline
尊敬	respect
正義	justice

2015.8.4 20:14

2015.8.4 20:14

「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。タンザニアで、そして日本で、「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。

1915年7月1日。大阪朝日新聞1面で、第1回大会の開催が告知され、高校野球の歩みが始まった。タンザニアで、そして日本で、「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。

「オネガイシマース」。本墨付近に並んだ選手が一礼し、野球の紅白戦が始まった。終わると再び集まり、「アリガトウゴザイマシタ」。日本から約1万キロ離れたアフリカ東部タンザニア。現地に住む日本の元高校球児が3年前から野球を教え、昨年2月、初めての「タンザニア甲子園大会」が開かれた。試合は礼に始まり、礼に終わる。実は100年前、第1回全国中等学校優勝野球大会の開催にあたって定められたもの。国際大会にはないその習慣が、タンザニアに根づく。

アザニア・セカンダリースクールのコスマス主将は「規律と尊敬と正義の精神を学んだ。野球と出会って自分が変わった」。今年12月にある第3回に向け、白球を追う。

20面に続く

デジタル版に動画



1915年(昭和)の甲子園大会、あの歴史

甲子園を継ぐの決意

「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。タンザニアで、そして日本で、「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。

1915年7月1日。大阪朝日新聞1面で、第1回大会の開催が告知され、高校野球の歩みが始まった。タンザニアで、そして日本で、「甲子園」の夢を追う球児に会いに行った。

「オネガイシマース」。本墨付近に並んだ選手が一礼し、野球の紅白戦が始まった。終わると再び集まり、「アリガトウゴザイマシタ」。日本から約1万キロ離れたアフリカ東部タンザニア。現地に住む日本の元高校球児が3年前から野球を教え、昨年2月、初めての「タンザニア甲子園大会」が開かれた。試合は礼に始まり、礼に終わる。実は100年前、第1回全国中等学校優勝野球大会の開催にあたって定められたもの。国際大会にはないその習慣が、タンザニアに根づく。

アザニア・セカンダリースクールのコスマス主将は「規律と尊敬と正義の精神を学んだ。野球と出会って自分が変わった」。今年12月にある第3回に向け、白球を追う。

20面に続く

デジタル版に動画

